



放送センター開局

第一節 教育施設設備の充実

一、放送センター開局

放送センターは、全校が緊張のうちに昭和四十六年九月十六日午前八時三十分開局した。

全生徒が教室のテレビに注目する中で、校章がブラウン管に映し出され、校歌が流されて放送が始まった。学院長の挨拶では、この設備が今後の放送教育のより一層の充実を期待すること、そのためには運営委員会を発足させ、この活用について十分研究を重ね運営に当たらせること、

ロング・ホームルーム、芸術鑑賞教育、クラブ活動の発表、読書教育など多面的に活用していく旨のお話があった。来賓の市川市教育委員会指導課長の安藤一雄氏、富士銀行八幡支店長の草野順夫氏からも、お祝いの言葉を頂いた。

その後、一〇人から成る運営委員会が発足し、十一月二十三日には、道徳とロング・ホームルームを研究題材に、放送施設を初めて活用した第七回校内視聴覚教育研究会が開催された。

それから今日まで、放送の活用と充実に努め本学院教育の一つの特色として発展してきた。

二、L I 教室の増設

いずれの学習指導においても、教材教具の整備とその活用が大切であるが、英語科において、「聞く」「話す」の学習には、L I 施設とその活用が欠くことができない。本学院のL I 施設は、昭和四十二年十月に一教室が設けられたが、その十分な活用のために、更に一教室の増設を必要とした。このため、家庭科館四階の西側の図書館の集会室をL I 教室に転用することとし、内部を改造し、ナショナルの簡易ラボを設置することになった。工事は、四十五年三月下旬の春休みから始めて、四月半ばに完了した。新設されたL I は、従前のコロナビアのラボ使用の反省から、新しく工夫をこらして、語学演習室にふさわしい立派な施設ができた。

三、医務室の整備

以前から、保健室は日当たりが悪くあまり適当ではないとされていたが、たまたま校舎の増築などで、教室その他が整備された際に保健室を日当たりのよい場所に移すこととなり、新たに医務室と名称を改めた。また、この機会に内部の整備を整えて、ベッドを一〇台としたのははじめ、乾熱滅菌器、冷蔵庫、流し台、消毒器台、機械戸棚、薬品戸棚、物品保管戸棚などを整備し、一つの診療所として発足し、その機能を十分

に發揮することとなった。

第二節 中高一貫教育の充実

一、「一貫教育研究」はじまる

新教育課程実施期の昭和四十七年九月、中央教育審議会答申に示された「中高一貫教育」について、文部省から研究調査の委嘱を受けた日本私立中学高等学校連合会は、一四名の委員を決めて「私立中高一貫教育研究委員会」を組織し、昭和女子大学付属中高校長人見楠郎先生を委員長として研究事業を進めることになった。その研究委員として本校から久松英壽教諭が選ばれた。

二、本校における生活指導の一貫教育

本校は「生活指導面における一貫教育の効果」について、次のような考え方をとりまとめ実践してきた。

- 学級担任、教科担任について中高両方を担当させる。
- 中高合同の職員会議をもっている。
- 中高合同の生活指導部会をもっている。

- 旧中学三年担任と、高校一年担任との連絡協議会をもっている。
- 定期的な事例研究会をもっている。
- 中高職員室が同室である。

以上のようなことから教師間の連絡が密で、生徒の理解を深めることができ、適切な指導ができる。

また教育相談室における問題生徒の長期にわたる指導、生徒にとって自分を理解してくれている教師の存在と、中高六年間を通じて生まれる教師と生徒の信頼感及び好ましい人間関係のために指導がしやすい。それに高校において何か問題行動があっても、中学時からの長期的な観察と、その記録があるために迅速かつ適切な指導が可能である。

第三節 県史に残る「千葉県の先覚」

昭和四十八年は、千葉県が発足して一〇〇年にあたるところから、県の発展に寄与した人達を故人から一〇〇名選び「千葉県の先覚」として顕彰することとなり、同年八月わが昭和学院の創立者である故伊藤友作先生も先覚の一人として選ばれることとなった。

第四節 教育充実計画の実現

一、総合グラウンドの拡充

創立三十周年の記念事業として懸案であった総合グラウンド拡充計画は、昭和四十五年頃から始めた地元住民の方との土地買収と、水路、道路の用途廃止の話し合いに時間がかかったが、昭和四十八年十月はじめに完成した。

グラウンドの面積は従来の一・五倍となり、一万平方メートル、二〇〇メートルのトラック、七面のテニスコート（内二面はバレーボール兼用）、フィールドはハンドボールコートとして整備された。

二、充実した理科・体育施設

新築工事はじまる

新理科館・第二体育館の建設計画は、創立三十周年記念式典に際し、向こう五カ年の本学院教育の充実計画の一環として計画されたもので、理科館は、理科教育の充実発展のため、第二体育館は、クラブ活動をは



理科館・第二体育館

じめ一般生徒の体育教育の向上を目ざして体育施設の整備を図るために建設されるもので、昭和四十七年四月にそれぞれの建設委員会を発足させ、種々の角度から検討し、また他の諸施設などを見学してその粋を集めて設計を進め、翌四十八年三月から建築工事を開始した。

工事は、三月二十日からその建設場所にあたる旧第二体育館、第六号校舎のとりこわしからはじめられた。四月二十九日には、とりこわしの終わった建設予定地で午後一時から地鎮祭がとり行われた。建築資材が不足し、価格が高くなる矢先であったが、朝日建築設計、多田建設その他工事関係の方々のご協力により予算内で請負契約を結ぶことができて、工事ははじめた。工事は順調に進んだが秋に入り石油危機に見まわれ、資材不足に拍車がかかり、価格は異常に高くなり、工事は難渋したが、予定工期を一ヵ月程遅れて四十九年一月完成することができた。

菅野辺に偉容を誇る新館

新理科館は四階建ての近代的建物で、一階に総合準備室、地学室、二階に生物室二室、三階に化学室二室、四階に物理室二室、その一室は階段教室、その他各階に各科目の準備室、二、三、四階にそれぞれの研究室、三階に暗室、天秤室が設けられた。父兄の協力で実験台はすべて専

門メーカーの設計になる優れたものであり、教室には薬品棚、備品標本棚が沢山設けられ、化学室にはドラフトチェンバーが備えられた。映写設備も整いい、また、放送教育を理科指導にとり入れるために、本学院では初めての他に少ないカラーの受像設備を導入し、各室にモニターテレビを設置した。その施設設備は、中高の理科教育においては最も完備した県下有数のものとなった。

第二体育館は、重層構造で、一階は主として球技用とし、バスケットボール・バレーボール・バドミントンの設備を備え、三階は、卓球と体操の用具器械が整えられた。床はブナのフローリングで、各種のスポーツ設備が整備され、体育の指導とともに、一般生徒が休み時間や放課後、スポーツを楽しむ場として使用した。その他に付属施設として一一の部屋、二つの更衣室、洗面室が設けられた。

落成式挙行

落成式は、昭和四十九年一月二十九日、来賓、父兄代表など招待者三〇〇名を越す出席者で、厳粛な中にも華やかに挙行された。



第二体育館落成式

なお式典後、階上の祝宴会場に出席者の方々をお招きして、ささやかながら心からの祝宴が催された。来会者は、その後理科館の各教室を見学された。

第五節 躍進めざましい運動部

一、若潮国体華々しく開催

第二十八回国民体育大会は、待望久しかった本県において開催が決定し、「若潮国体」と命名し、昭和四十八年十月十四日から十九日まで、県下各会場で秋季大会が盛大に行われた。本校からも高校選手として国体強化選手に指名されて大活躍した。特にハンドボールは本校の松岡裕見、榎原直子、高橋とも子、地主弘子の高三の四選手を中心として決勝に勝ち進み、惜しくも敗れたが、本県が女子総合全国第二位を獲得する上に大きな力となった。

つづいて、翌四十九年の第二十九回茨城国体では、夏大会で本校水泳部高三の石沢薫選手が二〇〇メートル平泳ぎにおいて二分五三秒八という好タイムで優勝、本県女子水泳として国体ではじめて種



本学院前を走る
若潮国体聖火リレー

目優勝を達成した。また、茨城国体の秋季大会では本学院選手を中心とする本県高校選抜バスケットボールチームは決勝に進み、大阪選抜に六二―六一で惜敗し第二位となった。

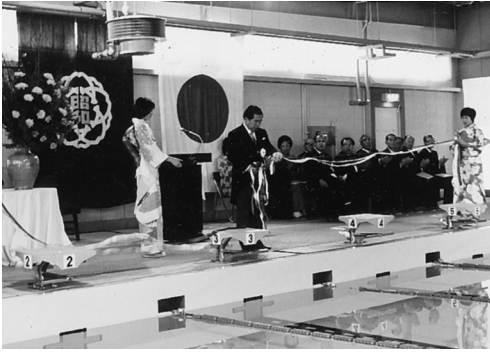
二、バスケットボール部全国二位入賞

昭和四十九年八月、福岡市で行われた全国高校選手権大会で、本校バスケットボール部は第三位入賞という輝かしい成績を収めた。遙か遠い九州の地の、味方の声援もない中で、本校の選手たちはのびのびとプレーをし、準決勝では敗れはしたものの、好プレーで善戦する本校選手に観衆の温かい拍手がおくられた。同月二十一日、八幡会館において、バスケットボール部の入賞祝賀会が開かれた。来賓、父兄及び職員の代表などの方々が多数出席され、健闘した選手たちに盛大な拍手と祝福の辞がおくられた。

第六節 創立三十五周年を迎えて

一、創立三十五周年記念式典挙行

昭和五十年十月十七日(校内)・十八日の二日間にわたって記念式典が盛大に挙行された。十八日の式典は、午前十時二十分から本学院講堂において、川上県知事をはじめ多数の来賓、父兄の列席のもとに、本学



室内温水プール落成式

院弦楽部によるモーツァルトの交響曲の華麗な演奏ではじまった。

学院長式辞のあと、総数七五名もの教職員、父兄が表彰された。また川上県知事をはじめ、川瀬成田高等学校長、衆議院議員白井莊一氏夫人から祝辞をいただいた。

式典終了後、第一体育館において祝賀会が催され、学院長の挨拶のあと、神田日出学園長、上野千葉商大付属高等学校長から祝辞をいただき、川上県知事の乾杯の音頭で祝宴はなごやかに行われた。

二、室内温水プール落成

室内温水プールの落成式は、昭和五十一年一月十七日、約二五〇名の来賓の方々の出席を得て、盛大に行われた。式はプールサイドで行われ、沼田県副知事をはじめ多くの方々の出席をいただき、開式の辞のあと、吹奏楽部による「君が代」の演奏があり、プールに張られたテープへの鉄入れが、学院長の手によって行われ、紅白のテープが満場の拍手の中に切られた。

次に学院長の挨拶があり、室内温水プール完成までの経過や、その概要についての話があった。

続いて工事関係者に対する「感謝状」の贈呈があり、学院長から朝日

建築設計事務所長、多田建設株式会社社長に贈られた。ついで沼田県副知事のご祝辞をはじめとして沢山の祝辞をいただいた。

式後、同プールでは特別演技として、早稲田大学の柳館毅選手をはじめ、稲泳会の有名選手による模範演泳が披露された。

来会者は、室内温水プールという数少ない施設に興味をもち、また、厳寒のこの時期に水泳ができることに驚きながら熱心に施設設備を見学していた。

その後、第二体育館階下で祝賀会が催され、この立派な施設は来会者から大きな賞賛を受けた。

三、食堂の完成

創立三十五周年にあたり、記念事業を検討したが、教職員、学生生徒の多くに利用される施設としての食堂を新築することが適当であると決した。従前の食堂は、既に老朽化しており、明るく衛生的でしかも美しい食堂をつくることが要望された。昭和四十九年秋から建築準備にとりかかり、翌五十年一月に工事に着手した。建物は鉄骨式プレハブ二階建て構造で、一階は一般食堂、二階は会食室・宴会場などに使用されるも



新築された食堂内部

ので、三月末に完成した。それとともに従来の食堂を壊して、その跡をアスファルトで舗装して、教職員の駐車場をつくった。また、隣接場所に売店等を同じ建築構造で新築した。なお、通路なども新たに整備され、校舎の周囲が見ちがえるように美しくなった。

第七節 学院長中国訪問

近くて遠い国であった中国との国交が正常化された昭和四十七年以来、両国間には今までの空白をうめるかのように文化・経済において、活発に交流が行われるようになった。千葉県私学団体連合会では二回目の訪中団を企画し、本学院長伊藤一郎先生を千葉県私立学校教育者友好訪中団の団長として昭和五十四年八月六日から十七日までの十二日間、文化大革命以後の新しい中国を訪ね、友好関係を深めることになった。一行は千葉県私立学校の理事長、学院長を中心とした、添乗員一名を含めて総員一八名の訪問団であった。

第八節 全国一をめざして

一、高校スポーツ界の名門校へ

本校では、一貫してクラブ活動を奨励し、指導してきた。その成果は次々に開花してきた。特に、昭和五十一年より昭和五十五年に至る活動は、本校のスポーツ史にとって、輝かしい足跡を残したものとして注目される。昭和五十一年は、バスケットボールが長野県松本市で行われたインターハイで決勝に進出し、接戦の末延長戦で惜敗したが、全国第二位の成績をおさめることができた。今一つは、佐賀国体において、ハンドボールが、関東の優勝チームにふさわしい活躍をして、決勝戦に進み、善戦して敗れたが、これまた全国第二位を獲得し、本学院開校以来の最も輝かしい成績をあげ、私たち学院関係者の大きな喜びとなった。その他に、水泳部が室内温水プールの完成により、常に練習ができるという恵まれた条件のもとに実力を高め、インターハイ、国体にも出場し、いくつかの種目で入賞した。

昭和五十三年の福島県を中心としたインターハイには、本校から総勢六〇名という今までにない多数の選手を送った。バスケットボール、ハンドボール、バドミントン、新体操の各チーム、それに、陸上競技四名、卓球二名、水泳一〇名の選手である。バスケットボールは、新メンバーのチームであったが、準決勝に進み、

第三位を確保した。ハンドボールは、十二回目の出場という全国の名門校であるが、二回戦で優勝校と対戦し、善戦の末敗れた。その他のクラブはともに今一步というところであった。その中で、水泳チームは、関東大会に初優勝し、インターハイでは総合成績全国八位の好成績を得ることができた。つづいて、長野国体では、本校水泳選手は、県選手の中心として活躍し、平石選手が一〇〇メートル背泳に優勝、高橋選手が一〇〇メートル自由形三位、石黒選手が四〇〇メートル個人メドレー入賞と、はなばなしい活躍をした。また、バスケットボールが第三位の成績をあげ、陸上競技の走幅跳の遠藤選手が好記録で四位に入賞した。

なお、特記すべきことは、水泳の中一の林純子選手が、この年、一〇〇メートル、二〇〇メートル平泳ぎで翌年のモスクワオリンピック候補選手に選ばれ、二月十日から二十八日まで、オーストラリアへ遠征し、その国際大会の平泳ぎで優勝という好成績をあげたことである。

昭和五十四年度の運動クラブの活躍には目ざましいものがあつた。春には全国高校選抜大会に、バスケットボールとハンドボールが出場し、バスケットボールは勝ち進んで、決勝戦で東京代表の東亜学園を七二―七一で破り、宿願の全国制覇の夢を実現することができた。なお、四月一日から十日まで台湾バスケットボール協会の招聘で訪台し、国際大会に出場し国際的にも活躍した。八月のインターハイは優勝を逸したが、第三位に入賞した。ハンドボールは、全国高校のベスト四に入ったが、優勝校の石川県小松高に惜敗し第三位となり、水泳部はインターハイで、総得点三四点を得て、第三位に入賞することができた。また、宮崎国体においても、高橋（自由形）、平石（背泳）、石黒（メドレーリレー）の各選手の活躍は、本県の大きな得点